参画だより

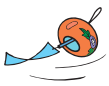
№38
2009.7.31
弘前市民参画センター

内閣府
男女共同参画シンボルマーク

男女共同参画

今年は、平成11年に男女共同参画基本法が制定されて10周年。内閣府男女共同参画局は、広報啓発活動で活用し、それぞれの地域や個人がより身近な問題として意識することを目指し、男女共同参画のシンボルマークを作成しました。

一般公募から最優秀賞に選ばれたこの作品には、男女が手を取り合っている様子をモチーフに、互いに尊重しあい、共に歩んでいけたらという願いが込められています。



弘前市民参画センター事業紹介「**さんかくシアター**」ほか　Ｐ２・３
まなぼ「**子育て・自分育て・明日作り**」第１回　Ｐ４
おとこの気持ち聞いちゃいました「**人との関わりが思いやりの源**」　Ｐ５
さんかくひとりごと「**誰かが気づけば……**」　Ｐ５
男女（ひと）・団体（グループ）紹介「**未来を担う子どもたちの飛躍のために**」　Ｐ６
利用者･利用団体紹介「**弘前・宮沢賢治研究会**」ほか　Ｐ７
本の紹介「**フレディの遺言**」　Ｐ８
センターからのお知らせ　Ｐ８

平成21年度　第1回ひとにやさしい社会推進セミナー
〈故（ふる）きを温（たず）ねて新しきを知るⅠ〉
「岩木山の解禁　～お山参詣への道～」

「男性と女性は『対等』ではなく『一心同体』。不完全なもの同士が補い合って完全になる」と話す講師の須藤さん

6月24日、「平成21年度第1回ひとにやさしい社会推進セミナー」を中央公民館岩木館で開催しました。

津軽地方では古くから岩木山信仰が根付いており、代表的な行事のひとつとして知られる「お山参詣」には、現在も老若男女を問わず多くの人が参加しています。今回のセミナーでは、山岳信仰の成り立ちや、明治初期の女人禁制解禁後に初めて岩木山に登った女性の記録などを通して、岩木山をめぐる身近な地域の歴史と文化について学びました。

◆女人禁制について

講師を務めた岩木山（いわきやま）神社禰宜（ねぎ）の須藤廣志さんは、明治初期に廃止されるまで、岩木山を始め多くの山岳霊場が守っていた女人禁制について民俗学や宗教学の観点から解説しました。その中で、禁制が必ずしも厳重に守られてはいなかった例や、足腰の弱い女性のために設けられた制度ではないかという説があることなどを紹介しました。

また、聖域に女性を立ち入らせない理由として、女性が不浄であるからとする見方については「女性は決して不浄ではない。女性の地位を不当に低くみて、男尊女卑と結びつけようとする人たちが都合のいいように解釈しているのでは」と話しました。

◆山岳信仰と岩木山

須藤さんは続いて、山岳信仰について説明しました。

「山岳信仰の要素は、形が秀でていること、火山のような特異現象があること、神聖感があること、気象と密接な関係があること、河川、池沼、巨岩、温泉などがあること。岩木山はこの要素すべてを兼ね備えている。さらに、『畏怖』と『恩頼』という2点も信仰の根底にある。命の根源である水を恵んでくれる岩木山は山岳信仰そのものであり、『岩木山』という言葉だけで津軽の歴史、文化、習俗すべてを表現できる。岩木山があるから津軽がある、ということもできる」

と、須藤さんは津軽に住む人にとって岩木山と信仰が深く関わっていることを述べました。

ユーモアたっぷりの須藤さんの講演に聞き入る参加者

◆岩木山に登った女性たち

「神の山」として敬われ、女性は登らない方が良いとされていた岩木山ですが、明治5年に全国の神社仏閣の女人禁制を廃止する布告が出されたことから、女性の登山も認められるようになりました。須藤さんは解禁後の明治6年に初めて岩木山に登った弘前市出身の女性、兼平亀綾について、「初登頂は60歳のとき。65歳で亡くなるまでに計3度の登頂を果たした。夫に先立たれたあとは琴や三味線を教えて生計を立てており、非常に自立した女性だった」と評しました。

また、明治末期に私立弘前女学校の生徒たちが実施した岩木登山や、米国人女性が登頂したときのエピソードを紹介し、「キリスト教徒の女性が日本の神の山へ登るということで、当時の人々は驚いたが、止める人はいなかった。そのことからも津軽の人がいかに大らかであるかわかる」と話しました。

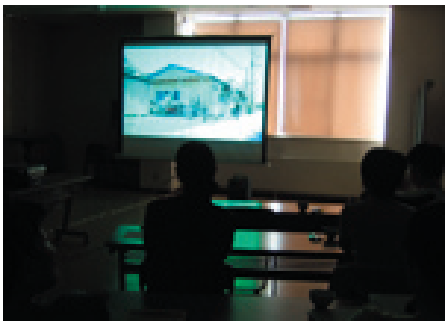
セミナーには岩木地区を中心に約50人の市民が出席し、岩木山と女性にまつわる知識を深めていました。

平成21年度　第1回さんかくシアター　開催

6月4日、弘前市民参画センターでビデオ上映会「さんかくシアター」を開催しました。

昨年度実施した「さんかくシアター」では、主に子育て中の女性へのリラックスタイム提供を目的としていましたが、今年度は対象を一般市民に広げ、より幅広い層の人が映画鑑賞を楽しめるようになりました。

今年度第1回目のさんかくシアターは、「弘前じぇんだぁ学習グループ～きづき～」が企画運営を行いました。上映に先立ち、メンバーの3人は自己紹介の仕方など日常の場面を例に挙げて、自分らしく生きるためのポイントを提案しながら、参加者へ男女共同参画社会についてわかりやすく解説しました。



じっくりと映画に見入る来場者

今回上映した「どんぐりの家」は、聴覚障害と知的障害を持つ主人公の少女が、家族や学校の仲間たちと互いに支え合いながら成長していく様子が描かれたアニメ映画。少女と母親のふれあいを中心に展開する感動の物語に、来場した多くの人が涙する姿が見られました。

「さんかくシアター」は今後8月6日、10月8日、12月3日（いずれも木曜日）に開催する予定で、各回とも定員は先着20名となっています。参加・託児室の利用ともに無料ですが、事前の申込みが必要です。

問い合わせ・申込み先
弘前市民参画センター
TEL 0172・31・2500
FAX 0172・36・1822

「さんかくネット」子育てサポーター　研修会

6月9日、弘前市の子育てサポートシステム「さんかくネット」に登録している子育てサポーターの研修会を弘前市民参画センターで実施しました。

今回の研修会では「若い親子の日常の様子と身近な材料によるおもちゃ作り」と題して、みどり保育園地域子育て支援センター副主任保育士の小山洋詞子（よしこ）さんが、レジ袋やハンカチなどの身近にある素材を使ったおもちゃ作りの講習を行いました。小山さんは子どもの年齢に合わせた遊び方や注意点なども説明し、研修に参加したサポーターは、今後の活動に役立てようと熱心に聞いていました。

また、小山さんは、保育園や子育て支援センターに訪れる親子の様子から、「身近に相談相手がいない親や、他人とあまり関わりたがらない親が増えているようだ」と近年の子育ての状況について印象を述べ、「近頃の親は急いで結果を出そうとする傾向がある。結果だけではなく、子どものやる気や考える力を伸ばすような育て方を心がけてほしい」などと、親や子どもとの接し方についてサポーターへアドバイスしました。

講師の小山洋詞子さん

おもちゃを作りながら
サポーター同士も交流

まなぼ

「子育て・自分育て・明日作り」第１回

一條敦子（平成 21 年度連載担当）
博士（学術）。専門は成人教育（女性教育）、子育て支援、まちづくり。
学習企画集団「ＣＯＣＯＡあおもり」・生活者支援団体「ふれ～ふれ～ファミリー」代表。
男女共同参画社会と子育て支援について、シリーズでお伝えします。

男女共同参画社会への一歩

★太宰治と国立市公民館の若いお母さんたち

「自分の幸福の観念と、世のすべての人たちの幸福の観念とが、まるで食いちがっているような不安、自分はその不安のために夜々、輾転し、呻吟し、発狂しかけた事さえあります。自分は、いったい幸福なのでしょうか。」（太宰治『人間失格』より）

誰でも、ふと立ち止まって「本当に私は幸福なのか」と疑問に思ったことがあると思います。そんなとき「考えても仕方ない」と諦める場合もあります。でも、「このままでは嫌だから、どうにかしたい」と強く思うこともあったはずです。太宰の文章を読んだとき、国立市公民館に保育室の設置を申請し実現させた若いお母さんたちのことを思い出しました。

★国立市公民館の「若いミセスの教室」

このセミナーは、子どもをもつ若いお母さんたちが感じている女性問題に焦点をあて、女性たちが気づき、解決する方法をみんなで考えあう、という特徴をもったセミナーです。1971 年から実施されており、国連婦人の十年が始まった 1975 年以前から行われていたことはとても画期的なことです。テキストや学習内容があらかじめ用意されていたのではなく、次のような方法で行われました。

○メンバーが出し合った「私にとっての女性問題」から、４つのテーマ（１主婦と老後、２主婦と職業、３夫との関係、４子どもを産むこと）に分ける。
○ひとり１つか２つのテーマを選んでグループを作り、レポーターを決める。
○レポーターは、セミナーの場で問題提起の役割を担当。話し合いの進行や統合ではなく、あくまでも自分の問題として意見を出す。
○セミナーでは毎回テープを録り、記録をコピーして次週に配布する。

全 15 回の学習のほか、テープおこしや記録のまとめ、その合間をぬってレポートの準備のための話し合いなどが続きましたが、その間は「忙しかったけれど、とても充実した時間だった」そうです。
この過程で、誰かに指導され評論されるのではなく、女性問題についてメンバー自らが「私にとって」どうかを真剣に見つめたのでした。

そして、この公民館では 1965 年から無料奉仕で学習中に臨時の託児を行っていましたが、このセミナーの学習の積み重ねによって、女性たちは保育中の女性の学習を支える条件整備としての保育室、預ける母親にとっても預けられる子どもにとっても学びの場となる保育室の意義を訴え、設置を実現させました。

★弘前市の男女共同参画

国立市公民館の若いお母さんたちは、「なぜ私だけが子育てをしなければいけないのか」「なぜ母親は我慢ばかりをしなければならないのか」と、育児から性別役割分業を批判し、社会を動かしました。男性にも男性問題はたくさんあるはずです。男女共同参画社会は、女性と男性が築いていくものです。弘前市には公民館や市民参画センターなどがあり、さまざまな情報を提供しています。また、男女共同参画に取り組んでいる研究者や学習している仲間もたくさんいます。みんなが連携し、協力していけたら弘前市の男女共同参画も確実に進歩するはずです。

学習企画集団「ＣＯＣＯＡあおもり」……ＣＯＣＯＡとは、コミュニティ・コーディネーター・アクションの略。すべての人が互いを尊重しながら、個性と能力を発揮できるような生き方を目指す学習を企画・実践し、支援することを目的としている団体です。昨年は独立行政法人福祉医療機構（ＷＡＭ）の助成金事業「親子ハッピースタディズ」を実施。今年度は、昨年度作成した冊子「ハッピーをたべよう」を用いて、小学生やその保護者に向けた学習会を実践予定。出張学習会も受け付けます。

おとこの気持ち聞いちゃいました

Q．手伝っている家事はありますか？

A．今やっていることは茶碗を洗うことと布団干し。今後は食事の支度もやってみたい…という希望はある。

Q．なぜ手伝うのですか？

A．妻にはいつまでも元気でいてもらわないと、自分も困るから。

Q．感謝されていますか？

A．はい。

Q．「男女共同参画」という言葉を聞いたことはありますか？

A．知っている。しかし、「説明して！」と言われてもできない。

Q．「男だから女だから」という枠がなく、その人らしく生きていくことについてどう思いますか？

A．（すぐに）とてもいいことだ。自分も好きなことをやりたいし、妻も好きなところへ行けばよい。

60 代・現在は無職・既婚

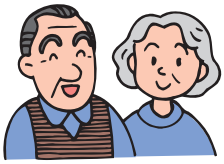
インタビューを終えて

～人との関わりが思いやりの源～

ひとにやさしい社会推進セミナーにいらしていたＴさん。観光ボランティアをしているので、歴史の勉強に…と思って参加したそうです。ほかにも、歩こう会などいろいろなことに興味を持って取り組んでいる方でした。たくさんの人と関わっている人は、相手のことを思いやることが得意なんじゃないのかなぁと思いました。　ＫＥＩ

誰かが気づけば……

定年退職し、少しホッとしたころ…
「夫（または妻）と一緒に暮らせなくなったとしたら？」
こんなことを考える人が多いようです。そんなある家庭のお話です。



40 年間のサラリーマン生活を終えたＭさん。ある日、ふと考えました。
「妻がいなくなったら、自分は生きていけるのか……？」
そこで、Ｍさんは妻と話し合い、自分も家事の一部を引き受けることに。

- 犬の散歩
- 家の周りの掃除
- 風呂の準備（掃除を含む）
- 週２回の夕食作り（その日はＭさんの休肝日）

それを続けているうちに、妻と家にいるときはその他のことも一緒にするようになりました。妻も趣味の講座や山歩きなどで気軽に家を空けることができるように。ちょっと家事をするようになったことで、お互いが気兼ねなく外出できるようになりました。

さんかくひとりごと

誰かが気づけば、世界は変わる
そんな気がしませんか？

「未来を担う子どもたちの飛躍のために」

国際子ども文化芸術交流実行委員会

☆子どもたちの飛躍を期待して！

皆さま、こんにちは。アンニョンハシムニカ！　国際子ども文化芸術交流実行委員会です。世界各国の子どもたちと日本の子どもたちが、文化・芸術活動を通してお互いに理解を深め国際感覚を養うこと、ステージを通して貴重な経験を積み、自己を確立し、行動に責任を持って未来に向かって羽ばたいてもらうことを目的に、平成19年9月に発足しました。現在、会員25名、参加団体代表者、賛同者で構成されています。

私たちは、優れた技術と表現力を持った子どもたちが、海外で活躍している子どもたちと国際的な文化芸術交流を行うことで、さらなる飛躍が期待できると考えています。そして、弘前市や青森県の子どもたちの文化発展と芸術による国際交流の準備を進め、去る7月5日に、「2009国際子ども文化芸術交流　Junior Artist Festival」を開催することとなりました。

フィナーレ　「世界がひとつになるまで」

☆感動と興奮のステージ！

フェスティバルでは、韓国果川市清溪（クワッチョン　チョンゲ）初等学校の10名の子どもたちをお迎えし芸術交流、異文化、異分野を最高レベルの空気振動で体感。関係者一同、感動と興奮のうちに終えることができました。

楽しさ、自由を得るために、あいさつと厳しいトレーニングがあります。ステージで学んだ子はとても強い。感性が磨かれ、工夫と努力で困難を乗り越えるでしょう。他者を大事にすることは自分を大事にすることだと気づくでしょう。子どもたちは、アジアの一員として、世界の一員として、参加者一人ひとり、未来を担う核となっていくことでしょう。

弘前における国際子ども文化芸術交流は、今回韓国の皆さまと交流することができましたが、実行委員会として、少しずついろいろな国を学びたいと思っています。

最後に、開催翌日、メール投稿して下さいました方の文章をご紹介し、今回の成功を皆さまとともに喜びたいと思います。ありがとうございました。

「国際子ども文化芸術交流のイヴェントが関係皆さんの協力で無事円滑に、大きな満足感を与えて無事終了したことを心からお祝いし、そのお骨折りに万空の感謝と御慰労を申し上げます。地球規模から見ればささやかな一石の催しかもしれませんが、人類の歴史の中で星のように輝きを残したステージを天は決して見逃すことはないでしょう。『世界が一つになるまで』そのひとつの歩みを刻んだ小さな石を大切にこれからもみんなでこの目標に力を合わせていきましょう。」

打ち上げとさよなら会。韓国ＣＧ Artist21と日本の子どもたちが韓国語で「アリラン」「果樹園の道」を合唱。

国際子ども文化芸術交流
実行委員会
委員長　木村直美
弘前市新寺町1の33
電話・ＦＡＸ
０１７２・３５・５８２５

弘前市民参画センター利用団体紹介

《弘前・宮沢賢治研究会》

DVDで気楽に賢治を楽しむ会

弘前にも宮沢賢治は来てたんですね。戦時中、弟清六さんが弘前の連隊に所属していたとき慰問のため花巻から訪ねてきたんです。連隊が岩木山麓の演習に出かけていたので、賢治は五能線に乗って鰺ヶ沢の山田野宿営地に足を運び、荒野で二人だけの饗宴をしたようです。

この子細を現地に調査し歌と詩の朗読を含めてまとめたのが故宮城一男先生制作スライド映画「山田野」です。

宮沢賢治と岩木山。
（写真提供；宮沢賢治…林風舎
岩木山…藤田栄一）

20年前から、弘前の研究会は弘前大学を会場に、フィルムのスライド上映を見ながら宮沢賢治の研究を続けてきました。宮城先生お亡くなりの前後しばらく活動ができなかったのですが、昨年から市民参画センターで再び例会を始めました。

宮城先生が生前各地で講演なさった遺作スライド約40作品、テープなど素材料を東京在住の宮城弘美さんが編集を続け、数作品DVD化しました。弘前の例会では、毎回このDVD作品の上映会を開いています。

岩手山、早池峰山、雪渡り、座敷ぼっこ、種山ヶ原、北上川、五輪峠、原体剣舞連、鹿踊り、青森挽歌……まだDVD化されていないたくさんの作品がありますが、これからの例会に期待してください。

このほか、例会とは別に賢治の足跡や資料館を訪ねるツアーも行います。たとえば、花巻の賢治記念館・イギリス海岸、山田野・鰺ヶ沢、平内町の夏泊銀河ステーション、小岩井農場・鞍掛山、水沢緯度観測所などです。ツアーは8月、次回例会は10月11日に予定。気楽に賢治を楽しむ会です。年会費2千円、連絡先は事務局（葛西律子、在府町91の1、電話0172・35・2533）まで。

代表連絡先…藤田栄一
電話　090・1495・0179
メールアドレス
fujita-e@brown.plala.or.jp

センター利用者に突撃インタビュー

70代・男性

◆当センターを月に何回くらい、どのように利用していますか？

主に、所属している２つの団体の仕事で利用しています。ひとつは、年に３回ほど会議で、もうひとつは印刷機を使わせてもらうため、月に２～３回はお邪魔しています。どちらもたいへん助かっています。

◆男女は平等だと思いますか？

人権という面から言うと平等でしょうが、男と女にはどうしようもない違い（例えば身体的な違い）があるので、すべての面で平等とはいかないと思っています。

◆「女は家庭、男は仕事」という考えをどう思いますか？

私が子どものころの日本は、子どもが10人以上いる家庭がさほど珍しくない時代で、こういう考え方が主流でした。私も影響を受けたことは確かですが、現在ではもうそんな時代ではなくなったと思っています。

◆家では家事をやったりしますか？

家事とは、家庭内で生活上必要な仕事のことだとの定義からすれば、かなりやっている方です。老妻と二人暮らしですので、家事を分担しています。「男子厨房に入らず」ということは私は意に介しません。例えば、魚を下ろすのは私の役目です。私にとって、家事分担は一種のストレス解消法にもなっています。

素敵なご夫婦の姿が目に浮かびます。私もあやかりたいなぁ～。今度、魚を下ろすのをお願いしてよろしいでしょうか？
by　yoshi

市民参画センターからのお知らせ

※下記の催しの問い合わせ先・開催場所は
いずれも市民参画センターです

★さんかくシアター（無料ビデオ上映会）

◇８月６日（木）「息子」

時間：10 時～ 12 時（ビデオ上映）
12 時～ 13 時（フリータイム）

対象：一般市民

定員：20 名（申込みが必要です）

託児室：準備します（申込みが必要です）

今後の開催予定は 10 月８日、12 月３日です。上映作品は未定です。

★さんかくネット「つどいの広場」

日時：９月６日（日）10 時～ 12 時

内容：山田スイッチのおしゃべりサロン

対象：子育て中の家族

★第６回市民参画センター交流まつり

日時：９月 27 日（日）　10 時～ 15 時

内容：市民参画センターを利用している団体の活動紹介や市民との交流会など

対象：どなたでも入場できます

★開館時間の変更

市民参画センターは、８月１日（土）～４日（火）の４日間、ねぷた運行による交通規制等のため、17 時で閉館します。

★臨時休館

市民参画センターは、８月 24 日（月）･25 日（火）の２日間、施設点検等のため休館します。

編集後記

国際子ども文化芸術交流が盛大のうちに終わり、子どもたちが帰っていきました。４月､韓国に打ち合わせに行き、３ヵ月でこんなに盛大にみなさんを迎えることができたのは、スタッフのみなさんの並々ならぬ努力のおかげだと思います。民間事業でここまで運ぶ、ウーマンパワーに大きな拍手を贈りたい。　梅

本の紹介

タイトル

「フレディの遺言」

文　フレディ松川
絵　こころ美保子
発行　朝日新聞出版

すべての人に送る介護バイブル

「私がまさか　ボケることはないと　思われるかもしれませんが、先のことは　私にもわかりません。」という言葉で始まるこの絵本。読んだ後に心の中が温かいものでいっぱいになり､涙がこぼれそうになった。もしも私がそうなったら、きっとこうして欲しいと思うだろうなと……。

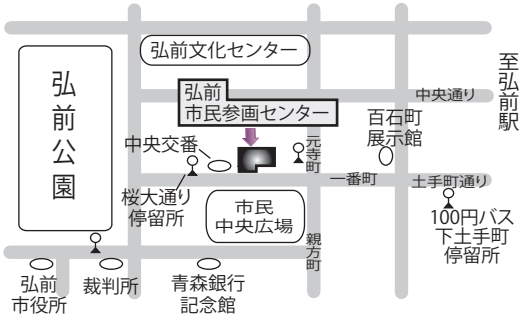
「私や家族がもし認知症になったら？」と誰もが一度は考えたことがあるのではないだろうか。どちらかというと、介護する側の大変さが取りざたされることが多く､介護される側のどうにもできない思い、不安、願いなどはあまり理解されていないが、それがストレートに読み手に響いてくる。文章はもちろんだが絵がとてもいい。

前半の「フレディの遺言」では「私がボケたときのお願い」が､後半の「フレディのアドバイス」では「家族がボケたときのために　自分のボケを防ぐために」として、認知症に備える心構えと知識がしたためられている。多くの患者を診続けた医師だからこそ伝えられることなのかもしれない。認知症の介護に向き合っている人にとっては大きなエールになるだろう。

年をとってから元気でボケない生活を送るためには「精神の自立」､「身体の自立」､「経済的な自立」の「三つの自立」が必要だと言う。これらの自立が同時にできればボケない確率が高いのだと。なかなか難しいことのようだが、「三つの自立」に向けたアドバイスを読むと、ちょっと元気が出てくるような気がする。

※著者は分かりやすいようにとあえて「老人のボケ」という言葉を使っている。

by　komori

弘前市民参画センター

〒 036-8355 弘前市大字元寺町 1-13
TEL　0172-31-2500
FAX　0172-36-1822
開館時間　9:00 ～ 22:00
休館日　12 月 28 日～１月３日
http://www.city.hirosaki.aomori.jp/gaiyo/shisetsu/kyouiku/htm_sankaku/framepage.htm